

4月から本学園の校長を拝命しました嶋野です。どうぞよろしくお願ひ致します。
勝手ながら私が感動した文章を皆様にもお読みいただきたく、「校長通信」を季刊で発行することにしました。初回は季節外れの題名ですが、純真な子供心がよく表現されていると思います。皆様からの感想などをいただければ幸いに存じます。白樺学園高等学校長 嶋野 幸也

「二人の小さなサンタさん」

工 藤 ゆ き (主婦)

こども未来財団-第17回こども未来賞・入賞作品より引用



「ゆきちゃん、今年はねえ、おばあちゃんのところにサンタさんが来たんだよ。」
年末の忙しい最中に、母からの電話はやぶからぼうに始まった。
「サンタさん?」、とうとう母も・・・と心配になった私は、少し大きな声で聞いた。

「そう、かわいいサンタさんが二人も。」
そういった後の母の話は涙声となり、電話で全てを聞くのに小1時間かかっただろう。
30も後半の娘をいつまでも“ゆきちゃん”と呼ぶ少々とぼけた母は、私が幼い頃から病気がちだった。

中学を過ぎて高校に上がったくらいだろうか、母の右手が麻痺し始めた。
散々痛み、痛みに悩まされた末の麻痺。熱い、冷たいが分からなくなり、ひどい火傷を繰り返し、茶碗を割り、スーパーで小銭をひっくり返し、毎日欠かさず手を合わせていた神棚の前で、かしわ手が打てなくなるまでに、そんなに時間はかからなかった。

大きな大学病院で、研究材料としてたらい回しにされ、ようやく付いた名前が「脊髄空洞症」だった。よほど怖い思いをしたのだろう。退院してきた母は、「もう二度と病院に行かない」と私たち家族に宣言した。

あれから20数年。その不思議な病気が、母の中で少しずつ進行する中、私は結婚し、二児の母になった。

そして、私の小学3年になる娘と1年の息子は、このとぼけたおばあちゃんが大好きだった。何か理由をつけては、子供達だけでお泊まりに行きたがる。

しかし、絶対に怒らない、何でもOKと笑って許しています。そんな無法地帯に子供だけ放り込むのは、親としては非常に心配だ。私は出来る限りいつも同行していた。

それを、この年の12月23日は、初めて解禁した。

「いい子にするのよ」「わがまま言わないのよ」「兄弟げんかしちゃだめよ」「おばあちゃんは左足と左手が不自由だから、大事にしてあげて」・・・たくさんの注意事項と共に預けたのだった。

「おばあちゃん!今日はクリスマスイブの日なんだよ」

「おばあちゃん!サンタさんにお手紙書いた?」

二人はおばあちゃん家に着くなり、競い合って話し出した。

座っているおばあちゃんの膝に手をついて、ピョンピョン跳ねながら。

「おばあちゃんの所へはサンタさんは来ないだよ」

おばあちゃんがそう言うと、二人は「じゃあ、おばあちゃんのお願ひ事はどうなるの?」

「おばあちゃん、かわいそう、かわいそう!」と大きな目をまん丸くして心配した。

「おばあちゃんの所へは、さなえちゃんとりょうくんが来てくれたから、もう願ひ事は叶っちゃったよ」

おばあちゃんは、そう言って二人を安心させてやろうとしたが、二人のあまりに深刻な表情を

見て言葉に詰まり、「大丈夫」と応えるのが精一杯になってしまった。

いっしょにごちそうを囲んで、ケーキを食べて、お風呂に入った。

「おばあちゃんの左手は、今さなえとつないどんよ」

そう言って、つないだ手をおばあちゃんの目の前に持ってきた。

「お風呂に入って、温かくなりよんよ」

弟のりょうは、その手を湯船につけておばあちゃんに教えた。

「ほんとだね」「ありがとう」と言った母の顔は、くしゃくしゃだったに違いない。

翌日24日、クリスマスイブの日、私の迎えを待っている母に、さなえはこんな事を言った。
「おばあちゃん、今夜はちょっと怖いけど、窓の鍵を1個だけ開けてってな。サンタさんが入ってくるけん」

「僕たちがお願いしてあげたけん。ちゃんとサンタさんが来るけん」

弟のりょうも言った。

二人は、わざとおばあちゃんの左手小指と指切りして、私の車に乗り込んできた。

急に静まりかえった家の中で、母はすきま風にパタパタ揺れる手紙を見つけた。そこには、二人の文字でこう書いてあった。

「サンタさんへ、さなえは何もいらないので、おばあちゃんの左手を治してあげてください」

「サンタさん、今年は僕んちに来なくていいから、おばあちゃんちに行っておいてください」

受話器越しに震える母の声を聞きながら、気付けば私も泣いていた。

「ありがとう、ゆきちゃん。最高のクリスマスやったわ」

長い電話は、そう言って切れた。

「子育て」という言葉は、いったい子供がいくつになるまでの期間をそう呼ぶのだろう。
身の回りと家事に翻弄され、戦争のような毎日が私にもあった。

でも真剣に向き合っていたら、子供達はこんな風に、ふっと答えをくれる瞬間がある。

「あなたの子育ては、間違っていない」と。

あれから6年、生意気盛りの二人だが、母も私もあの年のクリスマスを忘れない。二人の小さなサンタさんが来た、あの日を。

【校長雑感】

核家族化が進む中、子育てに不安を感じる親が増えているという話をよく耳にします。

しかし、自分も含めて、はじめから自信を持って子供を育てられる親がいたかということ、そんな親はどこにも、いつの時代であってもいなかったのではないのでしょうか。

人を育てるといえるのは、毎日試行錯誤の連続が当たり前。だって子供は、一人ひとり違うのですから……。

その中で、子供の成長が感じられた瞬間に、親も一緒に成長してきたのだと少しだけ自信を持っていいのではないのでしょうか……。

